

ヘーゲルのテキストによる心理臨床の声の意義の検討

A study on the significance of voice in clinical psychology
by using Hegel's text

山本喜晴*
Yoshiharu YAMAMOTO

抄録

本稿ではヘーゲルのテキストを参照しつつ、心理臨床における声の意義を検討した。ヘーゲルの言語観によれば、声は言語によって営まれる精神の活動の基礎とされる。ヘーゲルは声が身体に由来する感覚を疎外することで、精神を身体から抽出すると考えた。言語が文字に書かれる場合も声による語りを重視するあまり、ヘーゲルは文字そして言語の本質も音声の伝達にあるものと理解した。これは言語に対する限定的な観点ではあるが、心理臨床の方法にも見出される観点であり、心理臨床学の成立に関与する重要な視点であろう。声は精神が身体から分離される過程に現れる。このことは声が身体と精神を橋渡しすることを意味するが、同時に声は身体でもなく精神でもない。最後に、既存の身体と精神との自明性を否定するものとして声を聴くことが、心理臨床における心身の変容を促進することが示唆された。

Abstract

In this paper, the significance of voice in clinical psychology is discussed by using the text of G.W.F. Hegel. As per Hegel's view of language, voice was considered the basis of the activity of mind that was carried on with language. He thought that voice alienated the sensory, which is derived from the body in order to extract the spirit from the body. Because of attributing too much importance to speaking voice even in the case of written language, Hegel understood that the essence of letters and language was also the transmission of voice and sound. It could be a limited perspective to language, but we could find the same perspective in the methodology of clinical psychology. Voice emerges in the process of separation between the spirit and body. It means that voice connects the body and mind, but it also means that voice is different from neither the body nor the mind. In the end, it was suggested that listening to the voice as something which denies the obviousness of the body and mind could promote the transformations of the body and mind in clinical psychology.

* 関西国際大学人間科学部

1. 問題と目的

G.W.F. ヘーゲル (Hegel, G.W.F.) の思想が心理臨床学において取り上げられるのは、いくつかの文脈があるが、その中でも最も主要なものとして C.G. ユング (Jung, C.G.) との関連が挙げられる。ユングは我々と未知なるものとの遭遇によってもたらされる意識の変容の過程が、さまざまな対立物が結合していくかたちであられることに気づいた。さまざまな対立物の結合は老人と子供、男性と女性、光と闇、月と太陽、火と水、白と黒、運動と静止、水平と垂直、意識と無意識などのイメージ、あるいは動きそのものとして我々のもとに到来する。ユングが注目した対立物の結合の過程は、弁証法の過程になぞらえられ、実際ユング自身も対立物の結合として現れる心の救済の過程を「弁証法的¹⁾」と表現する。その弁証法を従来になく精緻に検討し、諸学の方法にまで発展させたのがヘーゲルの主要な功績であろう。ヘーゲルのいう弁証法とは簡略して言えば、A と A を否定する非 A との対立が、その対立を超えて止揚し、A も非 A をも超えた高次の B へと至る運動を指す。

しかし、ヘーゲルの論じた弁証法に対しては、近代以降さまざまな批判や指摘が寄せられている。心理臨床学においても、例えば長田²⁾ は、ヘーゲルのいう弁証法から取りこぼされていく「使い道のない否定性」に G. バタイユ (Bataille, G.) が関心を寄せていったことをとりあげて、そこから心理臨床における弁証法の限界について論じている。弁証法によって目指される止揚が安易なものになり向かうところが固定化され、既知のものになってしまうと、一見弁証法が生じているように見えても、謎や未知へと開かれていかない可能性が生じる。対立物の結合には偽の結合もあるだろうし、治療や変容に通じてゆかない弁証法や、通俗化され道具のように扱われる弁証法もありうる。その場合、たとえ対立物の結合が生じていても、本当に未知なるものは締め出される可能性も出てくる。そのような弁証法の落とし穴から抜け出す方法として、長田は J. デリダ (Derrida, J.) のいう「脱構築」を心理臨床に適用し、弁証法とは別の形での未知なるものに対するわれわれの態度を呈示する。

ヘーゲルの思想に対する批判はユング心理学の立場からも出されている。例えば小曾根³⁾ は、ユングが対立物の結合の過程として描いた個性化の過程と、ヘーゲルがいう弁証法の過程との差異を明確にしようとする。小曾根は W. ジェイムズ (James, W.) のいう多元的宇宙論に対して、ユングが最大の賛辞を送っていたことと、ユングが自らの理論についてジェイムズに恩義を感じていたことを指摘する。ジェイムズの多元的宇宙論と個人の多様性を礼賛する宇宙論であって、ヘーゲルが描く唯一の絶対者の高みのもとで全体として統一される一元論的な宇宙論に対置される。ジェイムズは、ヘーゲルのいう弁証法の運動を支えている理性の働きと、そこに見出される絶対精神の存在は、個人の経験を結局は低次元のものとして扱ってしまうことになることを指摘する。絶対知が想定されることによって、そこから外れたものは非合理的なもの、不完全なものとなる。しかし、理性を超えた理解できないものは、全体を統一する一者からの視点ではなく、個々の現象において発現するものであって、世界を多元的にみていくことが世界における不完全なわれわれの状態に真に向き合える。ここに、絶対精神を措定するヘーゲルの方法と、ユングのいう個性化の過程との違いがあると小曾根はいう。

病や苦しみといった人間の非完全性に対して、根本的に向きあう心理臨床にとって、絶対精神を想定するヘーゲルの考えを参照したり、批判することが、なんらかの手掛かりをもたらすこと

は当然かもしれない。J. ラカン (Lacan, J.) もまた、ヘーゲルに言及している。ラカンが鏡像段階論においてとりあげた自我と他者の弁証法は、ヘーゲルの理論を下地にしていながら、ラカンが主体と他者との関係の果てに見出した大文字の他者とは、ヘーゲルのいう絶対精神や絶対者ではない。両者の決定的な違いとして、ラカンの理論では大文字の他者は実体化されるものではなく、不在であることがしばしば強調される。ラカンは通常のヘーゲルの理論とは異なる意味で弁証法を用いたため、ヘーゲルそのものの新たな展開ではなく、ラカンの思想はヘーゲルの理論との決別を含むものであったと、研究者の間ではおおむね考えられている（例えば十川（2000）など⁴⁾）。

以上のようなヘーゲルをめぐる言説を眺め渡してみると、ヘーゲルの考えと心理臨床とが決して無関係ではないことが分かる。特に、ヘーゲルの考えの限界を指摘したり、ヘーゲルの理論を否定的に乗り越えようとする試みは、現代の心理臨床の理論が成立するうえで、重要な契機とされているともいえる。ヘーゲルに対する否定の仕方はさまざまであるが、ヘーゲルを取り上げることは、心理臨床の諸理論の理解に対する前提をもたらしてくれるものと思われる。また、ヘーゲルの思想は、心理臨床において生じる様々な現象を理解する上で有用であると考えられる。

そこで本研究は、ヘーゲルは批判し、否定的に乗り越えることよりも、まずヘーゲルのテキストを参照することで、ヘーゲルの考えが心理臨床に対してどのような視点をもたらしうのか、心理臨床で頻繁に用いられる視点とどのような関連が見出されるかを考えたい。その切り口はさまざまにあるだろうが、ここでは人が発する声についてヘーゲルが自らの理論の中でどのように扱っているかを糸口として、心理臨床との関連を検討する。心理臨床においては語りが展開され、セラピストはその語りを聴く専門家とされる。もっとも、語りは言葉によるものだけではない。おもちゃを用いた語り、箱庭の語り、描画の語り、沈黙の語り、身体の語りなどもある。しかし、その中でもとりわけ声による語りの担う役割は大きい。沈黙から、重い口を動かして生まれる声、湧き上がる思いとともに、こみあがる言葉は、心理臨床においていつも独特の声によってもたらされるように思う。そのような心理臨床の声について、ヘーゲルの立場から光をあてることで、浮かびあがる事柄を検討したい。

2. 声の担う内面性

従来、心理臨床において声のコミュニケーションは重視されてきた。S. サリヴァン (Sullivan, S.) は精神医学的面接を「言語的 (ヴァーバル)」ではなく、「すぐれて音声的 (ヴォーカル) なコミュニケーションの場である」⁵⁾ と定義づけている。神田橋 (1990) は、対話精神療法において「語られるコトバ」がもつ、プレバーバルな要素を指摘し、それを「鳴き声」⁶⁾ といいあらわしている。また、飯森 (1998) は精神療法場面における言葉について、「精神療法場面においては語る内容ではなく、それがどのように語られるかという、語り方——“息づかい”こそが大切」⁷⁾ であると述べている。このように多くの臨床家が、面接場面でのクライアントの声が訴えかける表現と、セラピストの声がクライアントに与える影響に注目し、その重要性を認めてきた。言語行為としての「語り」を掘り下げてゆくとき、そこには言語以外の要素が見えてくるが、その代表が声の表現であり、多くの臨床家が言語行為としての「語り」の中に、非言語的要素として声を聴いている。

このような、声が身体と意識の深部を反映するという発想の直接的な由来は、ヘーゲルに見出すことができる。自然哲学と人文科学とをまとめて近代哲学を集大成したヘーゲルにとって、意識と身体との区別は、現代のわれわれが認識しているものとは異なっていた。ヘーゲルの後にわれわれの科学技術は発展し、物質の世界に対するわれわれ人間の態度は固定化されていった。その固定化によって、物質を操作する新しい技術が効率よく、着実に開発されるようになった。身体や行動も変容の対象とされ、ときにはそれらを操作の技術こそが治療であるとみなされる。確かに、現代の医療技術はそのような側面をもって進歩し、我々はその恩恵を授かっている。しかし、心理臨床は、区別され、固定されたはずの主体と対象との間に、分かち難いつながりがあることがもう一度問直される場である。自らと世界の間を問いただしながらも、心理臨床において、われわれは神や超越者といったものに自らの処遇をゆだねるのではなく、また、意識の在り方を脳の構造などの生得的な身体の仕組みに還元するわけでもない。そうではなく、自らの責任を自覚して自らの変容を目指すとき、ヘーゲルの考えは現代の心理臨床においても十分に参照に耐えるものと思われる。

ヘーゲルは声を人間の心理（内面性）と直接結びつけて論じ、声を精神活動の一つとして自らの思想体系の中に位置づけた。自然哲学を論ずる中で、ヘーゲルは「声は動物の高次の特権」⁸⁾であり、人を含むあらゆる声を出す動物にとって、「声は（中略）純粹自己であって、己を普遍的なものとして措定し、苦痛、欲望、喜び、満足を表現する。」⁹⁾と説明する。

声は呼吸をもとにして声帯でつくられた原音が、喉・口の中で整えられて、外部へ発せられる。発声に関与する器官は解剖学的に言えば、声帯を中心として、口腔・鼻腔が主なものとして挙げられる。しかし、発声に関わる器官はそれだけではなく、呼吸を支える横隔膜、肋間筋等々の筋肉の活動、さらには声の振動が伝わる骨格・体格、そしてそれらの背景となる様々な身体活動が関与している。このことから声には発声器官だけでなく、呼吸のリズム、脈動、消化系の蠕動など絶えず活動し続ける生きた全身が反映されるといえる。

意識は身体活動の結果という側面をもつが、身体を対象として能動的に動かすこともできる。声を出す行為についても、意識的に制御できる部分と、されない部分がある。たとえば声色をつかうとき、われわれは発声器官を操作することで、声質、抑揚、間の取り方、言い回しを別人の特徴として作り出している。また、例えば声楽における発声法の研究のように、身体の意識的な制御を通して、理想的な声を目指すことも可能である。これらは身体の意識的な制御によって声を操作する行為である。しかし、普段、われわれは発声法を意識して声を出していない。自分が出せる声の範囲の中から、無意識のままに声を選択して発している。間のとりかた、速さ、勢い、大きさ、発音の明瞭さ、そういったものを無意識に決めているが、その選択には習慣や文化が影響する次元もあれば、発し手の個人的な性格によって影響される次元もあると考えられる。さらに、意識で制御されない要素には、性格のようなある程度持続する特徴だけでなく、一時的な心の変化である情動の影響も含まれる。気が動転したときは呼吸が乱れ、喉がこぼり、声が震える。緊張で口腔が乾き、声がかすれることもある。また一般に気分がふさぎこんでいるとき、声は低く、小さく、勢いのないものになる。

以上のように考えてみると、声とは、声帯だけでなく身体のさまざまな部分の活動を反映し、人格や情動といった意識活動も反映しているものだと理解できる。声を発することと身体や意識との関連は、ヘーゲルの学問体系においては、感覚として説明される。以下しばらくは、ヘーゲ

ルが著した『エンサイクロペディー』において精神の哲学について論じた部分から、声と精神の関連を参照してみたい。

それによれば、感覚とは精神が「自分の個性のなかで行うおぼろげな営為の形態」¹⁰⁾ であるが、同時に「精神的な意識や理性のなかに現れるすべてのものは、その起源・根源を感覚の中にもっている」¹¹⁾ という。感覚は身体という個性・個別性に囚われた精神が最初に着手する営みであり、その後の精神の展開の基盤とされる。さまざまな境地へと赴き、果敢に自らの限界に挑戦し、自らを変容させていく、そのような意識にとって、いつでも返ることのできる原点が感覚とされる。

ヘーゲルは感覚作用に2つの領域を設ける。1つは、現在の心理学・生理学でも一般的に感覚と呼ばれているものに相当し、身体の各器官がもつそれぞれの規定に沿って内面化されることを指す。視覚は視覚器、触覚は皮膚というふうに、それぞれの器官の構造から一定の刺激が内面化されて精神活動の糧となる。だが、ヘーゲルはそれだけでなく、逆に、精神の規定の中で発生し、精神に由来する動きが身体化されることも感覚の作用とみなした。こうした現象は、現在の心理学では通常、感情や情動と呼ばれており、感覚からは区別されている。しかし、例えば「頭が血がのぼる」、「身の毛がよだつ」といった表現があるように、我々が怒りや恐怖と呼ぶ感情は、身体感覚の変化としても示される。ヘーゲルは、このような現象を、精神の規定が身体化される、と解釈した。そして、怒りや恐怖などのいわゆる情動も「内面的感覚」と呼んで感覚の範疇に含むことにした。

この内面的感覚の身体化はさまざまな表現によってなされうるが、声によって最も完全に達成されるとヘーゲルは考えた。なぜならば、「声のなかでは、(中略)観念的な肉体性——いわば非物体的肉体性——、したがって或る物質的なものが産出されるからである。」¹²⁾ 声は響きとなって発し手の身体と周囲の空気を震動させることで、物理的な動きを生じさせる。その生成された物理的運動は、身体の延長に生じるけれども、身体そのものに比べれば、非物体的であり、観念に近い性質を備えた実体として理解される。それらは観念的ではあるが、物質的なものでもある。「この物質的なものなかでは、主観の内面性は徹頭徹尾内面性の性格を保持しており、心の現勢的観念性は自分に完全にふさわしい実在性を獲得している。心の現勢的観念性に完全にふさわしい実在性とは、発声すると直ちに廃棄されるような実在性である。」¹³⁾ 心は、自分の性質をよりの確に反映させる物質的なものを声という媒体によって獲得するのである。

発せられては消失し、物理的な形ではのこらない、という声の特徴は2つの点において心にとって大きな意味を持つ。1つは、「音はひろがるやいなや消失するからである。それゆえに感覚は声を通して、自己(感覚)がそのなかで(肉体のなかで)外化されるやいなや死滅してしまうような肉体化を獲得する。ここに、声の中に現存しているいっそう高い力、すなわち内面的に感覚されたものを疎外する力の根拠がある。」¹⁴⁾ それゆえ心のカタルシスは声に出して語り、大声を出すこと、泣き叫ぶこと、で最も強く達成される。心の自由・能動性を妨げる余計な感覚(情動)が心から疎外され、スッキリするのである。これは、発声が心にもたらす作用として、現在でも多くの人に適用される方法だろう。声に出して語り、声を出して笑ったり、泣いたりすることによって生じるカタルシスをヘーゲルは感覚の疎外として理解したのである。

3. 声を聞くということ

臨床心理面接の見立てにおいて、クライアントが現在必要としていること、面接で取り組むことは、「気持ちを吐き出すことだ」と表現されることがある。心情を吐露する場所、吐露してもよい場所、吐露できる場所は、どこにでもあるものではない。ときには心理臨床がその場となることもある。声による感覚の疎外とは、まさに気持ちを吐き出し、たまった感情を解消することを意味する。ただ、単に声に乗せて気持ちを吐き出すだけなら、1人でもできるが、そうではなく、心理臨床家は聴くことの専門家であり、臨床心理面接での語りは、聴く者の存在を常に反映している。心理臨床において、声は発せられるものだけでなく、聴かれるものでもある。

身体の律動や振動、心拍、蠕動などを背負いながら発せられる声は、空気を震わせ、周囲の空間へ伝わり、声を聴くひとの元に届く。そして、聴き手の鼓膜を振動させ、その振動は聴覚器を経て神経を通る刺激へと変換され、脳へと至る。これが聴覚と呼ばれているものであるが、聴覚の認知、つまりわれわれが「聞いている」と意識するものは、聴き手個人の状態から切り離されて、客観的に存在しているのではない。「聞いている」ものは聴き手の意識のありかたの影響を受けて認知されているのである。一例として、カクテルパーティー効果を挙げることができよう。にぎやかなパーティー会場であっても、雑多な音の中から自分が関わっている会話の音だけをひらいて聴くことが出来るように、聴覚は注意を向けた声を選択的に拾っている。都会の音の洪水の中で、背景に流れている歌やコマーシャル・ソングが耳に入っている人もいれば、入っていない人もいるだろう。

意識の在り方によって、聞こえる音声は異なるのであるが、声を含めて音には聴き手の意識の在り方に関係なく、身体に物理的に直接働きかける力が備わっている。それ聴覚と視覚とは全く異なる伝達様式をもつことによって示される。ヘーゲルは「美学」について論じた講義の中で、絵画と音楽の比較を通じて、聴覚の主観的性質について述べる。それによれば、絵画を鑑賞するときには、観賞対象である作品と観賞主体との間に自他の区別があったのに対して、「われわれが絵画において眼前にみるものは、客観的な現象であって、それを直観する自我は内なる自己としてなおそれとは別のものであるにとどまる。(中略)ところが音楽ではこの自他の区別がなくなってしまう。音楽の内容はそれ自身において主観的なものであり、その外化は空間のうちに存続する客観的なものとなることがない。(中略)耳がそれをとらえるや否や、それは沈黙してしまう。音はただ心の奥底に余響をとどめ、心をその観念的主観性において感動させるのである。」¹⁵⁾

ヘーゲルは音をとらえる器官を耳に限って、聴覚と音との「自他の区別がなくなってしまう」と言っているが、これは、聴覚以外の身体感覚あるいは身体部位と音との関係についてもいえることであろう。音は聴く人の鼓膜をふるわせるだけにとどまらず、鼓膜以外の皮膚を振動させる。そして、外皮だけでなく、ときには「腹に響く」ように身体の内部に届くこともある。そのとき、音響は聴く人の鼓膜だけでなく、全身を震わせ、その律動の中に巻き込み、同化させてしまう。

音は鼓膜だけを振動させるのではなく、身体全体の皮膚に響き、震わせる。さらに、音は皮膚だけでなく、ときに体の奥にまで届く。音は空間のうちに存続しないからこそ身体に響き、心の中に余響として残る。音は聴き手の心と体に浸透し、一体化する。それはときに深い感動をひきおこす。そのため、音楽は絵画をはじめ具体的な造形物を媒介とした表現よりも、表現者と鑑賞者が区別されにくい、極めて融合的な経験となる。これが、感覚(情動)を他者に伝える上で、

声は最も伝導性に優れた媒体となる所以である。

さらに、声の発し手と聴き手はふれることでうまれる、接触面を越えて、共振・共鳴というかたちでまざりあう。心理臨床における音声を介した共鳴に関しては、仲 (2002)¹⁶⁾ や Rittner, S. (1996/1999)¹⁷⁾ によっても指摘されているが、中でも声は心身の共鳴・共振の場であり共感や間主観性が形成される主要な場でもある。

ここまで示してきた、声を「発する」行為と「聴く」行為とを照らし合わせてみると、それぞれ独立して扱えない次元があることが明らかであろう。声は発し手の身体運動を帯びたまま、身体の延長として外部に放出される。そしてその声は発し手のもつ「その人らしさ」や、そのときの心身の状態によって色づけられている。それは聴き手の鼓膜を震わすだけでなく、皮膚をはじめとした体全体を振動させる。またその認知は聴覚にみられるように、聴き手の意識状態から切り離せない主観的な側面をもつ。発し手の身体運動として生まれた声は、聴き手の身体にふれ、同化させ、聴き手のもつ色に混ざりながら同じ色で染めてゆく。それは「接触」であると同時に、「共鳴・共振」という言葉で表現されるものである。心理臨床における声の表現には、この聴き手と発し手とを独立して扱えない次元があることが重要である。自他の区別があいまいになり、重なり、まざりあう境地がそこには生じる。これらの境地は声の表現に限られたものではないが、声の性質を考慮すると、声は心理臨床における心身の共振・共鳴の主たる場、ということができると。

二者間における身体表現や身体感覚を介した交流が意識の形成に関わる、という考え方は、精神分析においても示されている。D. スターン (Stern, D.)¹⁸⁾ によれば、生後9～15カ月の乳児と養育者との間には、情動調律 (affect attunement) が生じ、情動状態が二者間で共有されることによって、主観的自己感が形成されるという。この、情動調律が生じる前提には、「異なった形式や知覚様式で起こるいろいろな行動表現が、何らかの形で相互に交感可能」でなければならず、これをスターンは「共感覚」あるいは「感覚の単一性」と呼んだ。情動調律は言語以前の声の表現と共に、身ぶり、表情などの身体を通じたコミュニケーションによってなされる。しかし、声を心身の共振・共鳴の主たる場としてとらえてみると、心理臨床場面における情動調律は、表情や身ぶりだけでなく、声のやりとりによってもなされていることになる。

以上のことから声は身体から身体への表現であり、聴覚以外の皮膚感覚・身体感覚にはたらきかけるものである、といえる。この現象は、鷺田が「声の肌理」¹⁹⁾ という言葉で示しているように、声によって肌がふれあうのである。声は相手にふれて、いたわることもできるが、傷つけ、侵襲することもある。

声が伝える感覚 (情動) は混ざり合う感覚だけとは限らない。声においては、共感の成立だけでなく不成立も甚だしいものとして生じる。例えば、音楽は常に心地よいものではなく、聞き苦しかったり耳障りな場合もある。同様に、声も非共感を通り越して、侵襲的に作用することもある。自他の区別がつかない落ち着いたなさ、気持ちの悪さ、耐えがたさも、声を介して生じることは無視できない。声によって共感し、ふれあい、まざりあうことが、不快であったり、侵入的であったりして、破壊的な作用を及ぼす側面についても、心理臨床においては見落としてはならないだろう。

心理臨床ではクライアントとセラピストとの二者間において、声を媒介として心だけでなく、心身ともに共振を体験するが、その共振が引き起こす共感と非共感とがともに生じ、対立する中

でクライアントの意識の新たなあり方が模索されていく。その過程はちょうどヘーゲルのような否定を内包する弁証法の過程として理解できる。ヘーゲルが声について考えていたことは、我々が心理臨床において行っている「語る」「聴く」という営みが、「治療」や「変容」へと至ることの根拠となりうるだろう。

4. 声から言語へ

心理臨床において声の表現は重視される。しかし、心理臨床においても、日常生活と同様に声は言葉のかたちをとって発せられることが多い。「ヴァーバルではなくヴォーカル」といつてみたところで、われわれは言語にならない声でコミュニケーションをとることはほとんどない。言葉のかたちをとらない音声もなんらかの感情を伝えるが、その伝え方はあまりにも生々しく、露骨である。それはまるで裸の自分をさらけ出すような気恥ずかしさを伴う。そのため、通常われわれは声のやりとりをするとき、たとえそれが間投詞や擬音、擬態語であっても、自分の属する言語文化の衣を声にかぶせている。「言葉から切り離された声に注目する」、「ヴァーバルではないヴォーカルな表現を重視する」という立場は、声の性質を限定的にとらえているのであって、声の性質を踏まえて声について考えてみるときには、声が纏う言葉というものを無視することはできない。

われわれの声が纏っている言語は、ヒトという種の特徴にさえなっている。動物も虫の音や鳥のさえずりなど、音を出すこともあるが（そしてそれはときに声と解されるが）、それは単純な信号であって、人間が話す言葉ほど複雑な意味を含んでいない。動物の鳴き声は、ヒトの声になって初めて言葉を生み出すにいたった。このことから、声は言葉を目指す、と言えそうである。これは系統発生的に言えるだけでなく、固体発生的に見てもいえることだろう。幼児の発していた鳴き声（泣き声）は産みの親をはじめとする周囲の大人たちが使う言語に揉まれ、巻き込まれていく。やがて、それぞれの言語文化の中で、喉の使い方、発声に関する身体を分節化され、思考さえもその言語独特の影響下におかれてゆく。大人になってしまうと、もはや言葉からはなれた鳴き声のみでコミュニケーションすることに抵抗すら感じるようになる。

幼児の声は周囲の大人たちの会話を耳にすることで、言語化されてゆくものであるが、その大人たちも幼い頃に耳にした声によって言葉を身につけた。親の親の親のその先にあるわたしたちの祖先の声から、始原の言語が生まれたのだから、言語は声なしでは成立しない。文字となって書く言葉も、もともとは声であった。現在、地球上から消えていく言語に思いを馳せるとき、言語はそれを使うヒトがいて初めて存在するものであるということを実感する。また、言語の始原を想像すると、人類がこの世に出現するまでは、言語というものは存在しなかったと思われる。そうすると、言語は声を発する人間という種の身体があって、初めて成立したのだと言えるだろう。

ヘーゲルも声から言語へと向かう動きを認め、そこには主体的な精神の関与があると評価する。「声の抽象的肉体性はまだ自由意思によって作り出された記号——知性と意志との精力によって文節をつけられた言語——ではなくて、単に感覚によって直接に作りだされた音にすぎない。（中略）動物は自分の感覚を外化する際に、分節をつけない声、すなわち苦痛または喜びの叫び以上には進まない。」²⁰⁾

ヘーゲルは声から言語への変容を、内面的に感覚されたものの肉体化が、不随意的なものから意識的で自由なものへと発展する過程だと判断した。声は発すると同時に消えることで、内的感覚を疎外する。さらに、内的感覚は言語化することで対象化され、主観にとって距離のあるもの、疎遠なものとなる。精神哲学を論じる中で、ヘーゲルは次のようにも記す。「分節をつけた言語は、人間がどういうふうに分節をつけた言語に自分の内的感覚を疎外するかを示す最高の様式である。」²¹⁾「人間の形姿は単に精神の最初の現象にしすぎず、言語は反対に精神の完全な表現である。」²²⁾ 肉体性としての声は、言語になることで不随意的に発せられることをやめてゆき、意識的に、自由意志のもとで感覚を疎外する。感覚の疎外によって精神は、より精神らしくなっていくのである。

これらの言葉は、ヘーゲルにとって、声が身体と精神の狭間であって、過渡的にあらわれるものだというを示している。あらゆるものを精神の現象としてみていくヘーゲルにとって、声はまだ個別性に閉じ込められた身体の名残をひきずる身体の延長であり、精神の不完全な表現である。ヘーゲルの視点は、身体も精神の現れの1つとして、全てを精神として理解するものなので、身体のうち埋もれた精神を、身体から分離するときの助けとなるだろう。例えば心理臨床においては身体化が問題になることがあるが、その際には切れている心と体をつなごうとする見立てだけではうまくいかないこともある。それよりも、心と体を意識的に区別し、明確に切り離すことで、健康なつながりを回復したり、自己治癒力によって、バランスをとりもどすことが重要になる場合もある。また、心理臨床では語ることで、行動化へと突き動かしていた無意識の動きを能動的に自覚し、精神の領域へと取り戻そうと試みることがある。そうした試みの根拠として、ヘーゲルの声と身体と言語と精神に対する考えを応用することができるだろう。

5. 身体と精神とのはざまにあらわれる声

ただし、ヘーゲルのいう精神は、その本性を絶対精神とする。「絶対者は精神である。」²³⁾ というように、精神は究極において絶対者、超越者と同一であるとされる。ヘーゲルの思想では身体は声となり、声は言語となり、言語は精神となり、その流れの中で、個としての在り方は放棄され、絶対的な存在としての精神に回収・還元される運命にある。そのような絶対者としての意味をもつ述語として、ヘーゲルは「精神」という言葉を使うのである。

同時にヘーゲルは、古くから心や意識を指す言葉として使われてきた「魂」という言葉を、精神とは明確に区別して用いる。「精神 (Geist) は魂 (Seele) とは別のものであって、後者は肉体性と精神のあいだのいわば中間者、あるいは両者のあいだの絆 (きずな) である。」²⁴⁾ という。ここには、アリストテレス (Aristoteles) 以来の魂の概念が踏襲されている。アリストテレス²⁵⁾ は魂 (プシュケー) を生きた身体・生体に備わった機能として理解していた。そして、人間、動物、植物を比較し、それぞれの違いを魂の違いと考え、魂の働きとして栄養の摂取、感覚、理性などを選定した。栄養の摂取は植物にも動物にも人間にも備わっているが、理性は人間のみ認められる。このことから、魂の働きは植物、動物、人間という順に階層構造をなすものとして考えられた。さらに、ヘーゲルは魂の階層構造の究極を絶対精神と呼んで、従来の魂という言葉で想起される内容と区別した。ヘーゲルのいう精神とは、魂という名でも呼ばれるわれわれの在り方の真の姿、本来の性質に対して付けられた名前である。

この魂と精神の関係からすると、声は魂と似通った位置に相当する。魂は「精神の睡眠」²⁶⁾ と

形容されるように、身体のうちには埋もれた精神である。身体によって生じる声は、言語の前段階にあり、ちょうど肉体と精神とをつなぐ魂に近いものとして位置づけられたのである。

絶対精神の観点から身体と声をとらえると、個としての身体から出発して、個を超えた絶対者へと至る道程の中に、声や身体が既に組み込まれていることになる。声や身体も本当は精神なのだということになり、声に固有の性質や身体に固有の性質はあまり顧みられなくなるかもしれない。ヘーゲルの思想では魂は絶対的な存在としての精神に回収・還元されるように、魂の経験としての病理や苦しみは、背後では絶対精神につながっていることになり、病や苦しみがそれぞれのものであるとして、自らの目的を達成しようとする動きが否定されるようにも思われる。

一方、心理臨床では声による語りを通じて、語り手の個性が展開される。その展開は病や悩み自体の展開でもあり、徹底して個性に根ざすところに、心理臨床の本質がある。個性というものは、家族や学級、地域社会などの集団と常に調和しているものではない。そうした集団の中では抱えきれないような個性を経験する人々が、自分の個性に向き合う場となるのが心理臨床である。困難は個性にはじまるが、その苦しみを癒すものも、クライアントの個としての在り方である。

絶対精神という高みに設定された視座でなく、不完全で病める個の視点のまま自らの目的を追求しようとする態度、精神ではない魂として、精神の立場から見れば中途半端な段階である声のまま、それ独自の方向性を模索する態度は、ヘーゲルのテキストにも見つけることができる。声と魂の立場を積極的に認める態度がヘーゲルのテキストにも認められるのである。それは、ヘーゲルが文字について語るときに明らかになる。

声が言語を目指す過程で、精神はより精神らしくなっていく。そして言語というかたちをとるようになった声は、次に文字として書かれるようになる。文字と理性の関連を思考しはじめたとき、ヘーゲルは、音標言語（表音文字をもつ言語）と書写言語（漢字のように、象形文字・表意文字によって書かれる言語）を比較して、音標言語が書写言語よりも絶対精神を目指すにふさわしい言語であり、理性を磨くことのできる言語だと考えた。「書写言語は単に、或る外面的に実践的な活動の助けを借りる言語が、特殊な領域でなしとげたところのいっそう発展した一形式の進行にすぎない。書写言語は、直接的空間的な直観作用の分野に進んで行って、その分野で記号を取り上げたり作り出したりする。さらに、象形文字書法は諸表象を空間的図形によって記号化し、字母書法はそれに反しそれ自身すでに記号である音によって記号化する。それ故に字母書法は記号の記号から成立している。そしてそのことはもとより、字母書法は音標言語がもっているもろもろの具体的記号を、すなわちもろもろの言葉をその単純な諸要素に解消し、そしてこれらの要素を記号化するという仕方で行われる。」²⁷⁾

ヘーゲルのいう書写言語とは音声以外の要素によって書かれる言語のことを指す。ここには、カリグラフィーのような字そのものの形の美しさを追求して書かれる文字にもあてはまる。また、古代文字のように文字は残っているが、かつて実際に発音された通りに発音する仕方がはっきり分からない言語体系にもあてはまる。字母書法は、アルファベットで書かれる西欧諸言語のように、ある音声を示すのに、その音声に対応する文字を書く表記法のことと相当する。「a」という音を示すために「あ」「ア」や「安」「阿」「亞」と表記する場合は、これも字母書法である。音標言語は字母書法によって書かれる言語だといってさしつかえない。ヘーゲルは、個々の音素を示す文字によって書かれる言語体系こそが、記号化の上に記号化を重ねていくことを可能にし、精神の高度な営みに適した優れた様式であると考えた。

これは、本来視覚的、空間的性質をもつ文字においても、聴覚や声に留まろうとする態度とみなすことができる。文字によって記号の記号が成立しているといっても、逐語的な音声の伝達に縛られる限り、精神として個々の身体を離れて純化を目指す方向は見えてこない。確かに、言語は文字よりもまず音声として出現したと考えられており、文字はもともと音声であったとされる。個人の言語獲得においても、会話や聴解の習得が読み書きの習得に先行する。しかし、だからといって、読み書きを身につけることによってもたらされる、われわれと言語との付き合い方の一大転換を軽視することにはつながらない。声によって培われた口承文学によって醸成された「声の文化」と、文字によって生まれた「文字の文化」との大きな違いは、例えば W. オング (Ong, W)²⁸⁾ の研究によって明らかにされる。にもかかわらず、ヘーゲルは音声としての言語観を保持し続ける。身体から出発して言語となり、その過程でより純粋な、より絶対的な精神へと向かう、という声に見出されていた精神の動きからすると、文字と声との関係においては不十分ともいえる態度をヘーゲルはとっている。

声の語りに文字を導入しつつも、文字のむこうにある声を尊重しつづける姿勢は、心理臨床の方法論にも含まれている。心理臨床の語りは声を媒体とするが、セラピストが聴き、体験した声による語りについて振り返り、詳しく分析する際には、文字によって記録する方法が採られる。それは、心理療法が登場する以前の癒しの行為であったシャーマニズムが、その伝承において必ずしも文字を必要としないことと比較してみると、心理臨床がいかに文字に負っており、記録を書くことなしには成立し得ないものであるかが分かる。それゆえ、心理臨床学は実践そのものだけでなく、文章を読んだり、書いたりすることからも学ばれるのである。その一方で、心理臨床学とは文章を作成するための学問ではなく、心理臨床での語りをいかに聴くかという実践のための学問である。その点で心理臨床学の方法には音声言語や言語以前の声の表現や息遣いを、文字記録の背後に読み解くような視点が含まれている。

ヘーゲルを参照しながら心理臨床を検討してみると、両者がいかに声を重視しているかが分かる。そして、文字においても声に留まろうとする態度からは、心理臨床の目指す意識というものが、必ずしも絶対精神のようなものではなく、個性を依然として携えたままのものとの関連から考えていくことがふさわしいと考えられる。

もっともヘーゲルは絶対者として絶対精神を措定したが、それは円満に全体性が成就した世界を描くためのものではなく、身体に代表される個別性と絶対精神の全体性とののっぴきならない断絶と、それによってたらされる緊張関係を認め、乗り越える道を模索していることを意味していた。心理臨床において声を聴く場合も、そのような個と全体性との切実なへだたりに到来するものとして聴くことが重要になるだろう。身体と精神の中間に現れる声とは、身体と精神をつなぐだけでなく、身体でも精神でもないものとしての声でもある。それは、心理臨床における文字記録に接するとき、文字にどう書かれ、どのような文章で書かれているかということではなく、文字の向こうに聞こえる声に耳をすまし、かつて響いた声を現在の立場からどう理解するかということが問われる事態にも通じている。心理臨床の記録では、音標言語として文字が声を伝えるのではなく、文字にならない声、逐語を超えて聞こえてくる声がかかる。心理臨床記録を通じた声の聴き方を、心理臨床実践に適用してみると、真に治療的な声とは身体も精神でもないもの、両者を否定するものとして聴くことができるのではないだろうか。今そこにおいて沈黙の中で息づいている身体を超えて声が発せられるとき、その場でさまざまに思案するクライアントとセラ

ピストの精神状態を超えたものを、その声はその場にもたらずように思われる。われわれは生きていく限り自らの身体を完全に離れることはできないが、同時に日々、刻一刻、既存の身体を否定している。精神についても同様の否定が向けられる。ヘーゲルを参照するとき、心理臨床における声は身体でもなく、精神でもないものとして、日々おこなわれる否定をより徹底した形でいうものとして聴くことができるだろう。

6. おわりに

本稿ではヘーゲルのテキストにおける声の扱いを参照して、心理臨床における声の意義を検討した。ヘーゲルにおいても心理臨床においても文字を使いながらも、その背後に声を聴くという姿勢を重視している。声は身体と精神とを単につなぐもの、身体と精神に作用するものとして道具的に扱うのではなく、身体でも精神でもないものとして受け取ることの意義が示唆された。声を発することは身体の変容や精神の変容にもかかわる。しかし、そのためには既存の身体でも精神でもない第三のものとして声の到来を待つ姿勢が問われることになる。そのような姿勢のもとに訪れる声を聴くことが、心理臨床における心身の変容を推進すると考えられる。

【引用文献】

- 1) Jung, C.G. *Psychologie und Alchemie*. Rascher Verlag. 1951 池田統一・鎌田道生訳 『心理学と錬金術』 人文書院 1976 49頁
- 2) 長田陽一 「テキストと未知なるもの」『心理臨床学研究』22巻6号 2005 585-595頁
- 3) 小曾根由佳「個性化と多元的宇宙——ジェイムズ思想によるユング心理学再考」『ユング心理学研究』第3巻 2011 59-77頁
- 4) 十川幸司『精神分析への抵抗 ジャック・ラカンの経験と論理』 青土社 2000
- 5) Sullivan, S. *The Psychiatric Interview*. W.W.Norton & Company Inc. 1954 中井久夫・松川周二・秋山 剛・宮崎隆吉・野口昌也・山口直彦共訳 『精神医学的面接』みすず書房 1986 22頁
- 6) 神田橋條治『精神療法面接のコツ』 岩崎学術出版社 1990 56頁
- 7) 飯森眞喜雄「芸術療法における言葉」徳田良仁・大森健一・飯森眞喜雄・中井久夫・山中康裕監修 『芸術療法1理論編』 岩崎学術出版社 1998 67-78頁
- 8) Hegel, G.W.F. *Enzyklopaedie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse*. 1830 加藤尚武訳 『ヘーゲル全集2b 自然哲学下』 岩波書店 1999 565頁
- 9) 前掲書 565頁
- 10) Hegel, G.W.F. *Enzyklopaedie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse*. 1830 船山信一訳 『ヘーゲル全集3 精神哲学』 岩波書店 1996 125頁
- 11) 前掲書 126頁
- 12) 前掲書 150-151頁
- 13) 前掲書 151頁
- 14) 前掲書 151頁
- 15) Hegel, G.W.F. (1837-1842) *Vorlesungen uber die Aesthetik*. 竹内敏雄訳『ヘーゲル全集20b 美学 第三巻の中』 岩波書店 1996 1924-1925頁
- 16) 仲淳「心理療法過程におけるセラピストの夢について」『心理臨床学研究』20巻5号 2002 417-429頁
- 17) Rittner, S. *Stimme*. Hans-Helmut Decker-Voigt, Paolo J. Knill, Eckhard Weymann (Hrsg.) *Lexikon Musiktherapie*. Hogrefe Verlag. 1996 阪上正巳・加藤美知子・齋藤考由・眞壁宏幹・水野美紀訳 『音楽療法事典』人間と歴史社 1999 206-218頁
- 18) Stern, D. *The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental*

- Psychology*. Basic Books, Inc. 1985 小此木啓吾・丸田俊彦監訳, 神庭靖子・神庭重信訳 『乳児の対人世界—理論編—』 岩崎学術出版社 1989 177頁
- 19) 鷺田清一 『「聴く」ことの力』 TBS ブリタニカ 2002 199頁
- 20) Hegel, G.W.F. *Enzyklopaedie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse*. 1830 船山信一訳 『ヘーゲル全集3 精神哲学』 岩波書店 1996 151頁
- 21) 前掲書 151頁
- 22) 前掲書 256頁
- 23) 前掲書 30頁
- 24) Hegel, G.W.F. *Enzyklopaedie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse*. 1830 真下信一・宮本十蔵訳 『ヘーゲル全集1 小論理学』 岩波書店 1996 134頁
- 25) Aristoteles *De anima* 中畑正志訳 『魂について』 京都大学学術出版会 2001
- 26) Hegel, G.W.F. *Enzyklopaedie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse*. 1830 船山信一訳 『ヘーゲル全集3 精神哲学』 岩波書店 1996 52頁
- 27) 前掲書 374頁
- 28) Ong, W. J. *Orality and Literacy* 1982 桜井直文他訳 『声の文化と文字の文化』 藤原書店 1991